

終電に乗りこむごとく大晦日仕事を終へてそばを食ふなり 伊藤一彦

「終電に乗り込むごとく」という何気ない比喩に注目する。忙しく急いで年内の仕事のあれこれを片付け、やっと終電車に間に合つてほつとした感じ。共感する読者が多いだろう。

不在者となりて投票所へ行けば廊下を歩むあまた不在者 細溝洋子

「不在者」という語の便宜的かついいかげんな用法に光を当てて、ぴりつとした風刺的な作にしあげた手腕に感心した。下句の切れ味、なかなか。

今年も庭に来てをる不格好な去年名づけしペンギンツグミ 天野明

「ペンギンツグミ」という渾名の面白さ。鶴は秋の季語。季語の助けで、秋のイメージをうまく一首にもちこんでユーモアの歌にしあげた。ツグミの寿命はおよそ十年だという。初句、四拍である。やや読みにくいが、また「この秋も」など改案はあるうが、これでいいだろう。猪に似たる男と牡丹鍋つつけばつづくほどの味はひ

久松宏二

これもユーモアをねらつた作で、結句が決まつて成功した作と見ていいだろう。ただ、「つづく」はいかがが。「鍋をつづく」という慣用的比喩表現を持ち込んだために、通俗的な匂いを持ち込んでしまった。

もう一度高く飛ぶためしやがみこむ齡と思ふ四十代

短歌の現在

No.408

今月の15首を読む

佐佐木幸綱

は 佐藤モニカ

昔の中国では四十歳を「不惑」と言つた。昔の四十歳よりいまは若くなつて、昔の年齢の八掛けとか七掛けとか言われているのはご存じの通り。第一の青春時代が終わつて、第二の青春を迎える、そんな意味に読んでいいだろう。こういう人生を視野に入れた作は、自身にとつて意外に大切な作になるかもしれない。

ピアノの音りと調律するひとの眼は彼だけの宙をみてをり 松本実穂

耳をベースにする調律師の作業を見まもりつつ、彼の視線に注目している点、独特である。最初「ひと」とあつて、次に「彼」と出てくる。何気ない展開ながら、小さな屈折感をもたらしている。

灯るとは人住む証 一つの灯ともす一人のいるを思えり 森祐希子

今月の一連中でみると、夜の飛行機から見た場面らしい。高度を下げて鳥取空港に近いあたり、それも市街地ではなくぼつんぼつんと灯りが見えるようなところのようだ。連作中だとそう了解できるが、この一首だけだとそうは読めない。真夜中のマンションを見ている感じか。それでもいいが、一首としてみると具体的な何かを指示する名詞がほしい気はする。

キーンとはる冷気わりこみえいえいと大鎌を振り白葉を切る 鈴木恵子

「キーン」「えいえい」、二つのオノマトペが位置をえ